

保団連 辺野古支援ツアー参加報告

「自分さえ良ければ」の心に気づき

副会長 小島 登（内灘町・歯科）



キャンプ・シュワブゲート前を訪れた参加者（写真左から7人目が筆者）

四月三十日（土）に保団連主催の辺野古支援ツアーに参加した。全国から十七人の医師・歯科医師が集まった。午前八時半にネストホテル那覇を出発し、バスの中で与儀喜一郎氏（沖縄県平和委員会）により基地の現状について解説を受けた。

米軍基地面積の七四%が集中

一九五六年から全国に駐留していた多くの米国海兵隊が、各地の反発を受けて沖縄へ移動してきた。現在、日本の国土のたった〇・六%である沖縄県に、在日米軍専用基地面積の約七四%が集中している。そのほとんどが沖縄本島に存在し、その面積は沖縄県の

一八・四%を占めている。そして、沖縄本島は県人口の約九一%を占めているので、基地が土地利用に大きな制約を与えている。利用できる民間地は限られ、持ち家率が低く、ほとんどの方が傾斜地などのアパート住まいとなっている。

また、沖縄県の経済は米軍基地経済に大きく依存していたが、道路や港湾、空港などの社会資本の整備に加え、就業者数の増加や観光、情報通信産業などの成長によって着実に発展してきた。基地関連収入の県経済に占める割合は、昭和四七年の復帰直後の一五・五%から平成二十五年度の五・一%へと大幅に低下した。米軍基地の返還が進展すれば、効果的な土地利用による経済発展により、基地経済への依存度はさらに低下するものと考えられている。

嘉手納基地、辺野古を見学

「道の駅かでな」に到着する。四階にて嘉手納基地を見学し、講義を受ける。その広さに驚く。羽田飛行場の約二倍ある。嘉手納町の八二・六%が基地となっている。ミサイル探知機や大気観測機など様々な専用機が配備されている。思いやり予算による大きな施設や広々とした住居が並んでいる。次に、辺野古へ向かう。綺麗な海と海岸線が広がっている。テント前

にて海を見ながら、この地の基地計画の変遷と二十二年間の活動についてお話を聞く。珊瑚や様々な生き物が暮らす綺麗な海を埋め立て、水面から約十メートルの高さで、東京デイズニールランドの二倍以上の広さの施設が建設される。大型船が接岸可能な護岸や水陸両用車の斜路など、普天間飛行場にはない機能も考えら

シリーズ 原発・いのち・みらい その39

保団連原発問題学習交流会

原発事故は

「国破れて山河なし」

理事 武藤 一彦（白山市・小児科）

四月二十四日（日）に東京にて保団連原発問題学習交流会が開かれました。本紙五月号にて参加した大平政樹副会長の報告を掲載したところですが、同じく参加した武藤一彦理事より報告記事が届きましたので、紹介いたします。

時代は再生可能エネルギー

大平政樹先生とともに交流会に参加させていただいた。福島原発事故以来、全国で原発問題が噴出し、現在稼働しているのは、鹿児島の内川（せんだい）のみとなっている。河合弁護士による講演で、政府が原発に固執する理由が、利権と天下りにあることが示された。しかし、原発の危険性が明らかになりつつある現在、国の取るべきエネルギー政策の方向性が国民の健康を阻害するものであつてはならない。すでに、大平先生の報告で交流会の概略が示されたが、それらも含めて少し詳しく伝えたい。

野本保団連公害環境対策部長が基調報告の中で、「川内原発をとりあえず止めて欲しい」とネット上で世界に呼びかけたところ、五日間で十万人から賛同が得られたとの報告があった。賛同は本日（五月二十四日）の時点で十二万人とさらに広がっている。原発事故は日本だけの問題ではなく、世界が注目していることを国は心に留めるべきである。「一時的にでも近く

米軍キャンプ・シュワブゲート前へ移動し、多くの市民の方々の前で長年の苦勞とこれからの激励する。大自然の素晴らしさを後世に残していきたい。今回参加して改めて、人でありたいと思った。無慙が接岸可能な護岸や水陸両用車の斜路など、普天間飛行場にはない機能も考えら

気づかされた。遠い沖縄の苦しみを知ること、そして共有することを学んだ。無慙無愧とは、人とせず、畜生とす。悪事を働いても、それを恥じることなく平気でいること。仏教に「無慙」は自分の犯した罪を、私の教えを破りながらもそれを恥じない心。「無愧」は自分の罪を他人に対して恥じない心のこと。

と、その気持ちを汲み取ることが安全の思想だと思ふ」と報告は続いている。さらに野本氏は、「世界が再生可能エネルギーに軸足を向けている。米ニューヨーク州では五〇%、ハワイ州では一〇〇%を目標に掲げている。世界の意識は高い。技術の進歩も早い。太陽光パネルが採算の取れる範囲になり、フランスではすでに道路に太陽光パネルを敷き詰めて始めているという。もちろん、大型バスが通っても大丈夫。風力発電でも、台風で倒れないような技術（来る前に倒しておく）が開発されている。再生可能エネルギーのみで世界が動くことが可能になっている時代に、安倍さんだけが原発再稼働に固執している」と解説した。

裁判運動から脱原発を

河合弁護士が作成した映画「日本と原発」の中にも強調されていたことは、も「裁判の強さ」である。裁判は多数決ではない。福島原発事故経験が、再稼働を押しとどめる判決に影響を与えている。裁判は「正義」であり、隠された真実を明らかにする。

映画の終わりで、日本全国五十四カ所の原発の映像が映し出されていた。止まったままの原発は、それで終わらない。全ての廃炉に、どれだけの費用と時間が費やされるのだろうか。そして事故が起これば、「国破れて山河あり」とは、いかにない。「国破れて山河なし」が原発事故の末路である。広大な土地が切り取られるというのが真実だ。今、日本国民が何を選ぶか、それが問われている。生か死か！

原発・いのち・みらいシリーズ講演会 第11回 小児外科医等と語る 小児甲状腺がん 講師 大浜 和憲氏 (小児外科医、石川県保険医協会原発・いのち・みらいプロジェクトメンバー) 河野 晃氏 (小児科医、石川県保険医協会原発・いのち・みらいプロジェクトメンバー) とき 2016年6月30日 19:00~20:30ごろ ところ 近江町交流プラザ 4階 集会室 [金沢市青草町88] 無料 定員80人 お申込みのうえでご参加ください。 石川県保険医協会 電話:076-222-5373 FAX:076-231-5156 Eメール:ishikawa-hok@doc-net.or.jp

原発事故は国民生活を根底から覆す。経済も文化も芸術も教育も司法も福祉もつましい生活もぜいたくな暮らしも何もかもすてた。したがって、原発の危険性を目をつぶつてのすべの営みは、砂上の楼閣と言えり、無責任ともいえる。そのことに国民は気が付いてしまった。問題は、そこでどういう行動をとるかだと思ふ。